Position Paper / Ko Kazaana

■自己紹介：

フリーランスジャーナリストとして、自由ソフトウェア運動やオープンソースムーブメントについて取材しています。大きな興味としては、コンピュータが人間社会に何をもたらすかという点にあるので、どちらかといえば、個別のソフトウェアの機能うんぬんよりも、それを実現している技術や、それを突き動かしている衝動……のようは方向に目がいくことが多いです。

1990年に創刊間もない「月刊スーパーアスキー」編集部へ雑用係アルバイトとしてもぐり込み、いろんなことをやらされたり、与えられたNEWS-821（4.2BSD）で夜な夜な遊んでいるうちに、いつのまにか自由ソフトウェア担当ということに。1992年春ごろ、特集で「PC UNIX」を取り上げることが決まり、その実験台としてLinuxのインストールをやらされたのが、Linuxとの関わりの始まり。当時は386BSDやMach/386のほうが本命だったので、そちらは先輩編集者が担当し、Linuxはオマケみたいなものだから「お前でいいや」という感じだった（MINIXをちょっといじってたから、という流れもあった）。でも実は、Linuxはあくまでも「実験」として動かしていて、自分の作業（メールや原稿執筆、編集）は、もっぱらNEWS-821のNEmacs（コンソール！）でやっていました。Linuxは使い物にならなかったので（ネットワークもまだまともじゃなかったし）。

その後、1998年からフリーランスとなり、1999年から2002年までは「月刊Linux Japan」で編集長（その後、編集顧問）を務めました。オープンソース、Linuxがビジネスとの結びつきを強めながら、ムーブメントが「ブーム」になっていく様を、専門誌として直に見聞できたのは幸運でした。

最近は、本業（主夫）が忙しいこともあってパブリックに名前を出すような機会を減らしていたのですが、「Japan Linux Conference 2009」（論文絶賛募集中！）のプログラム委員長をやることになってしまったので、また少し世間にも顔を出していこうかと考えているところです。

■最近の想い／憤り

●「自由ソフトウェアの良心」が忘れ去られようとしている

日常生活において民主主義や基本的人権を強く意識することはほとんどないけれども、これらを蔑ろにして良いというわけではないのと同じように、「ソフトウェアの自由とは何か」「ソフトウェアの自由は何によってもたらされているのか」ということも、日常的に意識することはなくとも、忘れてはならないことだと思っています。

●「オープンソース」についての間違った考え方

OSDはライセンスの必要条件にすぎず、オープンソース（的開発）のための十分条件ではありません。何のためのオープンソースなのか、その理由は人それぞれ違っていたとしても（それを許容するのもまたオープンソースですし）、そのためには何が必要なのかはシビアに考え、きちんと意識する必要があります。

もっともオープンソースというのは、もともと自由ソフトウェアの利便的側面に注目するというマーケティング戦略なので、「利便性」という点でいろんな受け止め方が生じ「オレのオープンソースはこれでいい」的な理解が広まることになってしまったのは、ある意味、必然的な帰結と言えるかもしれません。

●ソースコードだけでなく、経験も継承、共有されるべき

オープンソースは、事実上、コミュニティの存在が必然となります。しかし、そこでの実際の「立ち回り方」「ノウハウ」は必ずしも継承、再利用されていません（依然として特定個人への依存が強

い）。実際の経験から得られる「本当に必要なこと」こそ、オープンソースに関わる多くの人の間で共有されるべきでしょう。

■討論したい内容

- オープンソースありきではなく、どういうことにオープンソースが適用されるべきであるか
- この先も「X Window System」でいいんですか？
- 「自由」とはどこまで拡張すべきか、またそれぞれどの程度まで追求すべきか？

■WSへの貢献と期待

確たる結論とまではいかなくても、多様な意見を交わすことで本質の輪郭を浮かび上がらせられればと考えています。

■参考文献

The Open Source Definition
http://opensource.org/docs/osd

The Cathedral and the Bazaar（バザールモデルはもっと研究されてしかるべき）
http://www.catb.org/~esr/writings/cathedral-bazaar/cathedral-bazaar/